

# 点 訳 問 題 集 3

【改訂版】

— 例文編 —

2024 年 9 月

編集 発行 特定非営利活動法人  
全国視覚障害者情報提供施設協会

# 使用にあたって

1. この「改訂版 点訳問題集3 — 例文編 —」（以下「問題集」）および「改訂版 点訳問題集3（解答編）」（以下「解答編」）は、全視情協発行の「改訂版 点訳問題集1 — 語の書き表し方・分かち書き —」「改訂版 点訳問題集2 — 記号類の使い方・書き方の形式 —」による学習を終えた方々を対象に、実際の様々な例文によって練習の仕上げをしていただくためのもので、「問題集」は墨字、「解答編」は点字で作成してあります。
2. 例文の順番は段階や難易度を追うものではありません。目的や必要に応じて適宜選択してご利用ください。
3. 「問題集」は縦書きと横書きの例文が混在しています。また、例文自体に題名があるものとないものがあります。
4. 例文の採用にあたっては内容のまとまりをある程度考慮したため、各回の分量は均等ではありません。

※ この例文集に収録した文章は、著作権が消滅したものを除きすべて著作権者の許諾を得て使用しています。本「問題集」および「解答編」を許可なく改変・編集することはご遠慮ください。

2024年 9月 発行

編集・発行 特定非営利活動法人 全国視覚障害者情報提供施設協会（全視情協）  
〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-10-11  
マルイト江戸堀501号  
電話 06-6441-1068 FAX 06-6441-1066

外出から帰ると、私はまず、部屋のドアの右手に置いてある大型ポリバケツを触る。これが私専用の「郵便ポスト」だ。ゆすつてみる。ズシリと手ごたえがあれば、私の胸はずむ。点字図書館から送られてきた点字書が入っているからだ。

急いで部屋に持ち込む。「シドニィ・シエルダンかな？ それとも、ふなどよいち船戸与一かな？」同時にいくつかの本をリクエストしているので、何が送られてきたかは郵送袋を開けてみないとわからない。この二人の本だったら、まず間違いなく、明日は寝不足だ。袋を開ける。「えーっと、なになに、『野生の思考』……」文化人類学者、レヴィーストロースの有名な本だ。私もたまには学術書を読む。おかげで、今夜は早く眠れそうである。

私を含めて盲ろう者には本好きが多い。とりわけ、後天的に視覚と聴覚を失った人の場合、まず例外なく読書家である。そうした盲ろう者の中には、「私は毎日朝から晩まで本ばかり読んでいます」という人もいる。まさかと思うが、これが誇張ではないのだ。一般の本好きの人でも、なかなかこうはいかないだろう。しかし、盲ろう者が「毎日本ばかり読む」という場合、その背後には、過酷な現実が横たわっているのである。

盲ろう者はテレビが見えず、ラジオも聞けない。一人で散歩もできないし、電話で気軽におしゃべりを楽しむことも無理だ。学校に行くとか、仕事に出るとか、定期的に外出する機会があるなら、まだいい。外に出たときに、多くの人との出会いがあるからだ。しかし、ずっと家に閉じこもりがちなる盲ろう者の場合、たとえ同居の家族がいたとしても、一日中「することがない」のである。

まして、一人暮らしの盲ろう者で、外出する機会がほとんどなかったらどうなるのか……。それは、主観的にはほとんど「牢獄ろうごくの生活」に近い。あるいは、地下の洞窟に入って、長期滞在の実験を受け続けている、とても表現すべきか……。

こうした状況下で、多くの盲ろう者は本を読む。読まずにはいられないのである。一般に、読書の大きな目的は、日常の現実世界か

ら離れ、筆者や作中人物の体験を追体験することにあると言われる。だが、盲ろう者の場合、この通常の目的に加え、外界の情報から隔絶された“自らの希薄な現実”、自体を、読書によって埋めていくという側面があるのではないだろうか。盲ろう者の“現実世界”を豊かにしつつ、それによって、読書をさらに楽しむようにしたいものである。

（福島智著『渡辺荘の宇宙人——指点字で交信する日々』より）

## チルマークの言葉

アメリカの東海岸の北の方に、マーサズ・ヴィニヤード島という島がある。スピルバーグの映画『ジョーズ』の舞台となったところで、どこか裏さびれた、夏でも暖かくなさそうな海岸であり、あまりお金のない東海岸の住人が夏の間に遊びに行くところである。その島のチルマークという村には昔、聾者が多かった。ふつう、先天的な聾は、5700人に1人くらいの出現率なのだが、この村では全体の五分の一が聾者であったという。この村は漁村だったが、聾であることは漁をするのにあまり不便ではない。彼らはなんらかのコミュニケーションをとることが必要だったので、独自の手話を作り出していた。聴者も、彼らとの意思伝達が出来ないのは困るので、自然に手話を使うようになった。結局、この村のほとんどの人間が、手話を使うことになった。

漁をするとき、離れた船どうしで伝え合うためには、音声言語よりも、視覚言語である手話の方が、ずっと便利である。小さな手旗信号のようなものである。聴者どうしても、手話を使うことがあった。声が漏れる心配がなく、手の形を見せるだけでいいのだから、女性の前で猥談をしたとき、秘密の話をしたときなど、手話は音声言語よりもずっと使いやすかった。

1817年、アメリカで最初の聾学校が開かれたとき、この村の住民が、大挙入学することになった。今ある、いわゆるASL、アメリカン・サイン・ランゲージというのは、この村で使われていた手話が原型になっているという。ここで、チルマークの人々ははじめて文字教育を受けた。ここの学校を出て村に帰った人々は、文盲の人が多かった聴者たちに、新聞や手紙を読んであげたりしたという。つまり普通の英語を、聾者がASLに訳し、それを聴者がやっと理解する、という作業をしたことになる。

この村で、手話は、音声言語の代わりをしていたわけではない。使える人口としては、むしろ手話の方が多かった。手話が第一言語であり、音声言語は第二言語に過ぎなかった。

手話は、音声言語が出来ない人のための言葉であると考えている人は多い。しかし、そうではなく、手話は、一つの立派な言語であ

り、音声言語と対等の価値を持つ。手話は、感情表現などでは、音声言語よりもずっと豊かで、微妙なニュアンスも伝えられるという。

(金田一秀穂著『ことばのことばかし——「先生」と「教師」はどう違うのか?』より)

## 「コミュニケーション支援」とは

社会がユニバーサルで温かな雰囲気に含まれるための方法はさまざまあるだろうが、私は素朴な方法がかなり有効だと思っている。たとえば声をかけること。一見簡単に思えるが、内気な日本人にはなかなかむずかしいようだ。時々「勇気を出して声をかけました」と言われることがあるが、私は人様を取って食うわけでもなし、ひとこと声をかけるのにそんなに恐れられているのかと思うとんだか情けない。こわもてのおじさんが白杖から盲導犬使用に替えたら、とたんに犬につられて若い女性からどんだん声がかかるようになったという、ちょっと変な話もあったりして、声かけのほうの「開国」はまだまだこれからのように思われる。

昨今は「移動支援」という言葉のほかに「コミュニケーション支援」という言葉が聞かれるようになった。これは、障害物が見えないのでぶつかってしまう人を、単にA地点からB地点までつれていくという物理的な移動のサポートだけでなく、その過程で、街の情報や、買い物など暮らしに役立つ情報を提供したり、会話の相手となって当事者の生活を豊かにするというトータルな支援のあり方を意味する言葉だそう。たしかに、手引きをしていたとき、黙ってひたすら歩いているということはない。従来のガイドヘルプの場でも、あれやこれやと話が弾んでいるようだ。そんな会話を支援の一環と位置付け、意識的に高度なサポートに発展させようというのが、コミュニケーション支援の目的らしい。すばらしい発想だと思う。視覚障がい、まさしく情報障がいだからだ。必要な支援は移動だけではない。移動を含め、あらゆる情報をサポートしていただけたなら、私たちの歩行は、トータルなモビリティのスキルとなり、真の意味で社会参加の第一歩となることだろう。

早苗さんは、歩行訓練をしていて強く思うことのひとつに、とにかく周りの人が声を出してほしいということ挙げた。まったく同感だ。たとえ支援をしなくても、お互いの安全確保のための情報提供には意味がある。ここにベビーカーがあります、足元に荷物を置

いています、いま避けますから止まってください、車椅子を入口付近に止めていますのでひとつ向こうのドアから乗ってください…。そんなひとことがあれば歩行環境はずいぶん違ってくることだろう。言い換えれば、歩行における最大の関心事は、スロープや点字ブロックなどの設備だけではなく、周囲の人ともいえるわけである。

うれしい声かけで印象的だったことの一つに、こんな出来事がある。電車のなかで外国人の方が席を譲りながら、ものすごくたどたどしい日本語で「イマ・スワテモ・イイ」と教えてくださったのだ。言葉なんて話せなくても、声を出しさえすれば意思疎通はできるのだ。「おねえさん、いっしょに来ない？」などという怪しい声かけは困るけれど。

メッセージ。私たちも、前を向いて進んでいます。人生でも、歩行でも。

(三宮麻由子著『感じて歩く ルポエッセイ』より)



## 学生生活始まる

きょうから学校が始まりました。一週間くらいはおばさんにつきそって行ってもらうかと考えましたが、十五日の日に、入学手続きと一緒にってもらって、おおよその道順はわかったので、コーラルを連れて一人で行くことにしました。

地下鉄の駅までの道は簡単。ビスカヤ通りからパセオ・デ・ラ・デリシアスに出て、それを右に行き、通りを二つ渡って少し行くと、もうそこに地下鉄の入り口があるのです。時間にしてほんの五分ぐらいです。大学へはそこから八つ目、終点のモンククロワまでまず行きます。

「大丈夫、大丈夫」といっておばさんと別れたけれど、モンククロワに降りたら早速、出口を間違えてしまいました。改札を出る前に駅の人に確かめたところ、そのおじさんが大学側の出口まで案内してくれました。そこから今度はバスに乗り、七つ目で降りると、私が通う外国人コースのある校舎の前に着きます。

スペインではバスも地下鉄も、全然アナウンスがないのでとても困ります。車内放送だけでなく、入ってくる電車の行き先を告げるような構内放送もまったくないのですよ。だから乗り物に乗ったときは、いちいち駅の数を数えながら降りる駅を確かめるのです。

きょう、地下鉄の中で声をかけられました。

「きみはどこからきたの？」

「日本からです」

「そう。それでスペインには何しにきたの」

「スペイン語の勉強のためです」

「へえー。えらいんだね。この犬も日本から連れてきたの」

「そうです。盲導犬で名前はコーラル」

そんな会話をしていたら、駅の数がわからなくなってしまい、この人たちに、モンククロワ駅についたら、教えてくれるように頼みました。そのうち、慣れてくると思います。こちらの地下鉄もバスも乗り心地の悪いこと。椅子は大学の教室にあるような木、または合成樹脂の固いもので、音はうるさく震動も激しいです。

学校に着くとすぐに友だちができました。教室の場所を尋ねたカロリーナという、とても感じのいいアメリカ人の娘が、ずっと行動を共にしてくれました。私の時間割は、月、水、金が九時四十五分から一時四十五分まで四科目。火、木が十一時四十五分から十二時四十五分まで一科目です。

帰りにはモンククロワで親切な男の子と出会いました。きっと同じ大学の学生でしょう。彼は私の降りる駅であるパロス・デ・モゲールの改札まで送ってくれました。この大学生のように、地下鉄のホームや電車の中で会った人たちはみな私を“盲人”という特殊な目で見ることもなく、ごく普通の人のように接してくれます。盲人が社会の中で隔離されておらず、溶け込んでいるからでしょうか。

こうしてきょうの主なスケジュールはめでたく終了いたしました。

やっぱり一人で歩けるってすばらしい。コーラルと一緒に来て本当によかったと思います。もし一人だけなら、こんなに早く、人の手を離れて歩き始める勇氣はわかかなかったと思います。コーラルと二人だけで歩けば、他の人の都合に合わせることもなく自由だし、いろんな人の心にふれて、いろんな感動を味わうことができる。“生きている”って感じがするわ。

(赤澤典子著『ピレネーを越えて——典子とコーラルのスペイン留学』より)

北条色の濃い『吾妻鏡』は事件の前半を伏せて、後半だけを大げさに書きたたてたであろうが、ここではしなくも乳母めのとの持つ政治力が浮彫りにされているのはおもしろい。とにかく千万の乳母・阿波局は、みごとに鎌倉随一の権力者景時をその座から引降してしまったのだ。政治的には何の活躍もしなかったように思われている当時の女性が、じつは歴史の舞台でかなりの力を発揮していたこと、とりわけ乳母の力には恐るべきものがあることをしめしている点で、この事件は興味が深い。

ところで、この事件については、もう一つの見方ができる。これは千万の乳母対侍所の所司の戦いではなくて、複雑な乳母めのとどうしの戦いだったとも見ることができるのだ。なぜなら、景時は頼家の乳母めのと夫とだったからである。

ではなぜ、頼家のほかの乳母たち——例えば比企一族は景時の危機を救わなかったか。彼らは景時弾劾の訴状にも署名しているし、一宮での謀叛の噂が伝えられたとき、追討の責任者の一人として、勇躍鎌倉を出発している。

これはむしろ比企側が、景時をライバルと見ていたからであろう。さきにもちよつと書いておいたが、妻を乳母として送りこんだ有力御家人たちは、表面連合するかに見えて、その実、裏では激しくしのぎを削っている。比企側は景時の失点を見て、

——今だ、失脚させるのは……。

と思ったのだ。頼家が鎌倉御所となって以来、比企一族はすでに我が世の春が来たようなつもりになっている。その権力を完璧なものにするためには、機会を捉えて邪魔ものは殺せばいいのである。

が、結果において、景時の滅亡はどういう意味を持ったか。これについて、『愚管抄』の中にきわめて冷静な批評があるのはおもしろい。

「(前略) 正治元年ノコロ、一ノ郎等ト思ヒタリシ梶原景時ガ、ヤガテメノトニテ有ケルヲ、イタク我バカリト思ヒテ次々ノ郎等ヲ

アナヅリケレバニヤソレヲウタへ（訴へ）ラレテ景時ヲウタントシケレバ（中略）鎌倉ノ本躰ノ武士カヂハラ皆ウセニケリ。コレヲ  
バ頼家ガフカクニ人思ヒタリケルニ（下略）」

さきにあげた「本躰ノ武士」という文句は、じつはここに書かれている。つまり、有力な乳母夫を討たせてしまったことを、慈円  
は、頼家の思慮が足りなかったためと見ているのである。

（永井路子著『つわものの賦』より）

## 「自分とは何か？」を意識する人、しない人

「自分とは何か？」という問いを僕自身にむかっていると、これはなかなか答えにくい。まあ、パツと出てくるのは「心理療法家」という自分の職業でしょうね。これは自分と分かちがたいものがある。大学教授という職業は出てきませんね（笑）。

「これが私だ」という感覚をかなり強烈に持つタイプと、そういうふうには持たないタイプとあると思います。僕はずっと問い続けているけど、持たないほうのタイプでしょうね。だからこの仕事をしているのかも知れない。

カウンセリングに来られる方は、当然何らかの悩みがある。つまり、いろんな形で「自分とは何か？」という問いを発してくるわけです。カウンセリングというのは、その人にそって、自分とは何かということと一緒に考えていく仕事ともいえます。わかったと思っても、もっと深いところから問う人がくると、その人に合わせてさらに深い部分をさぐる。だから僕は、自分とは何か、死ぬまでわからないんじゃないかと思う（笑）。

## 「私は……です」から浮かびあがるもの

心理学のテストに、20クエスチョンズというのがあります。「私は……です」というのが二十書いてあるんです。その「……」の部分に、何でもいから出来るだけ早く書いて下さいというやり方です。「私は○野○子です」と、名前を書いてもいいし、「私は女です」でもいい。「私は私がいけない人間です」「私は私です」でも何でもいい。とにかくパツパツと二十書くわけ。

で、そのあとで、消してもいいと思うものから消していきます。そうやって消して、残った部分は、その人にとって大事な意味を含んでいる場合が多い。

深くはわからなくても、書いた本人が、あとから調べて面白いこともあります。——何でこんなことを先に書いたんやろ、とか、この項目を残したのはなぜだろう、とか。

日本人の場合は、わりに職業が出てきますね。それと名前、かな。日本人は、どこかに所属すると、それで自分の説明がつく気がするんですね。たとえば「毎日新聞の〇〇です」と言うと、まわりも「ハア、そうですか」と、その人がわかった気がする。だから自分も（これで決まりだ）となる（笑）。

（河合隼雄著『「新版」こころの天気図』より）

武蔵野に散歩する人は、道に迷うことを苦にしているのではない。どの路でも足の向くほうへゆけばかならずそこに見えるべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。武蔵野の美はただその縦横に通ずる数千条の路を当もなく歩くことによって始めて獲られる。春、夏、秋、冬、朝、昼、夕、夜、月にも、雪にも、風にも、霧にも、霜にも、雨にも、時雨にも、ただこの路をぶらぶら歩いて思いつきしだいに右し左すれば随所に吾らを満足させるものがある。これがじつにまた、武蔵野第一の特色だろうと自分はしみじみ感じている。武蔵野を除いて日本にこのような処がどこにあるか。北海道の原野にはむろんのこと、奈須野にもない、そのほかどこにあるか。林と野とがかくもよく入り乱れて、生活と自然とがこのように密接している処がどこにあるか。じつに武蔵野にかかる特殊の路のあるのはこのゆえである。

されば君もし、一の小径を往き、たちまち三条に分かるる処に出たなら困るに及ばない、君の杖を立ててその倒れたほうに往きたまえ。あるいはその路が君を小さな林に導く。林の中ごろに到ってまた二つに分かれたら、その小なる路を撰んでみたまえ。あるいはその路が君を妙な処に導く。これは林の奥の古い墓地で苔むす墓が四つ五つ並んでその前にすこしばかりの空地があつて、その横のほうに女郎花など咲いていることもあろう。頭の上の梢で小鳥が鳴いていたら君の幸福である。すぐ引きかえして左の路を進んでみたまえ。たちまち林が尽きて君の前に見わたしの広い野が開ける。足元からすこし下ら下がりになり萱が一面に生え、尾花の末が日に光っている、萱原の先きが畑で、畑の先に背の低い林が一叢繁り、その林の上に遠い杉の小杜が見え、地平線の上に淡々しい雲が集まっていて雲の色にまがいそうな連山がその間にすこしずつ見える。十月小春の日の光のどかに照り、小気味よい風がそよそよと吹く。もし萱原のほうへ下りてゆくと、今まで見えた広い景色がことごとく隠れてしまつて、小さな谷の底に出るだろう。思いがけなく細長い池が萱原と林との間に隠れていたのを発見する。水は清く澄んで、大空を横ぎる白雲の断片を鮮かに映している。水のほと

りには枯蘆かれあしがすこしばかり生えている。この池のほとりの径みちをしばらくゆくとまた二つに分かれる。右にゆけば林、左にゆけば坂。君はかならず坂をのぼるだろう。とかく武蔵野を散歩するのは高い処高い処と撰えらびたくなるのはなんとかして広い眺望を求むるからで、それでその望みは容易に達せられない。見下ろすような眺望はけっしてできない。それは初めからあきらめたがいい。

もし君、何かの必要で道を尋ねたく思わば、畑の真中にいる農夫にききたまえ。農夫が四十以上の人であつたら、大声をあげて尋ねてみたまえ、驚いてこちらを向き、大声で教えてくれるだろう。もし少女おとめであつたら近づいて小声でききたまえ。もし若者であつたら、帽を取って慇懃いんぎんに問いたまえ。鷹揚おうように教えてくれるだろう。怒ってはならない、これが東京近在の若者の癖くせであるから。

教えられた道をゆくと、道がまた二つに分かれる。教えてくれたほうの道はあまりに小さくてすこし変だと思つてもそのとおりにゆきたまえ、突然農家の庭先に出るだろう。はたして変だと驚いてはいけぬ。その時農家で尋ねてみたまえ、門を出るとすぐ往来ですよと、すげなく答えるだろう。農家の門を外に出てみるとはたして見覚えある往来、なるほどこれが近路ちかみちだなと君は思わず微笑をもらす、その時初めて教えてくれた道のありがたさが解わかるだろう。

(国木田独歩著『武蔵野』より)



突然婦人たちの間から悲鳴が一声、二声あがったかと思うと、大騒動になった。大人たちが気づかないうちに、九歳の姉のメイが面白半分にアガサを金庫室に閉じこめ、そしてミスター・アダムズがしたのをまねて門をおろし、コンビネーション錠のダイヤルを回してしまったのだった。

老銀行家はハンドルに飛びついて、それを一瞬ひっぱった。「このドアはもう開けようがない」と彼はうめいた。「時計のネジは巻いてないし、コンビネーション錠もセットしてないんだ」

アガサの母親がまたヒステリックな悲鳴をあげた。

「静かに！」とミスター・アダムズは震える手をあげて制した。「みんなしばらく静かにしてくれ！アガサ！」と彼はできるかぎりの声で叫んだ。「私の言うことを聞くんだよ」みんなが静かになると、真っ暗な金庫室に閉じこめられ、恐怖におびえて泣きわめく子供の声がかすかに聞こえてきた。

「私の大事なアガサ！」と母親は泣き叫んだ。「あの子は、おびえて死んでしまうでしょう。ドアを開けて！早くドアをこわして開けて！あなたたち、男のくせに、なにもできないの？」

「リトル・ロックまで行かないと、このドアを開けられる男はいないんだ」とミスター・アダムズは声を震わせて言った。「ああ、困った。スペンサー君、どうしたらいいだろう。あの子は——あの子は——このなかではそう長くもたないだろう。空気もあまりないし、そのうえ、おびえてひきつけを起こすだろう」

アガサの母親はいまや半狂乱になって両手で金庫室のドアを叩いた。だれかがダイナマイトを使ったらと言った。アナベルは、苦惱にみちた、だがまだ絶望しきってはいない、大きな目をジミーに向けた。女性にとって、自分が崇拝する男にできないことはなにひとつないらしいのだ。

「ラルフ、あなたはなんとかできないの——ねえ、やってみて！」

ラルフは唇と鋭い目に奇妙なやさしい微笑を浮かべて、彼女を見つめた。

「アナベル」と彼は言った。「君がつけているそのばら<sup>ら</sup>をばくにしてくれないか」

聞きまちがえたのではないかと半ば耳を疑いながらも、ドレスの胸にピンでとめたばら<sup>ら</sup>の蕾<sup>つぼみ</sup>をはずして、スペンサーに手渡した。ジミーはそれをチョッキのポケットに押しこむと、上着を脱ぎすて、シャツの袖をまくりあげた。その瞬間、ラルフ・D・スペンサーは死んで、代ってジミー・ヴァレンタインがよみがえっていた。

「みなさん、ドアからどいて！」と彼は言葉少なに命令した。

そして例のスーツケースをテーブルの上に置いて、二つに開けた。そのときから他の人間の存在などまったく意識にないようだった。彼はぴかぴか光った奇妙な道具を手ばやく、順序よくならべると、仕事にとりかかるときの癖で低く口笛を吹いた。他の者たちは黙りこくって、身動き<sup>みじろ</sup>もしないで、魔法にでもかかったようにジミーがすることをみまもっていた。

一分後にはジミーの愛用のドリルが鋼鉄のドアになめらかに食いこみ始めた。十分後には——これまでの記録を破って——門をはねあげて、ドアを開けていた。

アガサはいまにも死にそうだったが、無事母親の腕にもどった。

ジミー・ヴァレンタインは上着を着て、手すりの外に出て、玄関の方へ歩いて行った。歩きながら、なじみのある声が遠くから「ラルフ」と呼ぶのが聞こえたような気がした。だが彼はためらわなかった。

ドアのところで大柄な男がいくぶん行手をふさぐようにして立っていた。

「やあ、ベンの旦那！」とジミーはいまも奇妙な微笑を浮かべたまま言った。「やっと押えましたね。さあ、行きましょう。もうどうなっても同じことですよ」

するとベン・プライスはいささか奇妙な行動に出た。

「人ちがいしていらいっしやるんじゃないですか、ミスター・スペンサー」と彼は言った。「私はあなたを存じあげてはいませんよ。あなたの馬車が待っているんじゃないですか」

そしてベン・プライスは踵<sup>かかと</sup>をかえして、ゆっくりと通りを歩き去った。

(オー・ヘンリー著、大津栄一郎訳『改心』より)

教室のうしろに子どもたちの日記帳がたくさんおいてあった。どれもこれも手あかでボロボロになっている。そのことは子どもと小谷先生が、その一さつのノートの中でどれほど苦闘したか、よくものがたっていた。

太田先生はこの授業のはじまる前に教室にきて、その日記をひろい読みした。さとるといいう子どものかいた文を読んでひどく感動した。そして、この学級の子どもたちがすらすら文をかくひみつはこれだと思った。

「二がっきのまんなかへんになって、まいにちにつきをかくことになりました。あき、はやくおきてせんせいにみてもらいます。あき、はやくおきるのはつらい。につきがはじまるとぼくはあそびまがありませんでした。すこしかくともつかくことがなくなって、せんせいから、もっとがんばりなさい、といわれました。つぎのひ、きのうより二ぎようおおくかいて、もうおわり、ぼくはにつきはだいきらいとかいたら、せんせいがこんなことをかいてくれました。(さとるくん、につきがきらいとしようじきにかいたのはいいことです。でも、いまくろうしてたら、あとからきつと、よかつたなとおもうようになりますよ。くろうというものはいいもんですよ。もっともつとくろうして、あなたのあたまをしようとうにしなさい。ぶんをかくことはしんどいことです。せんせいでもひとばんぶんをかいたら、はががたがたになります。二はんをたべるといいです。さとるくんはぶんをかきおわたたら、はがいたくなりますか。ならないでしょう、まだまだがんばれるとおもいます。」

ぼくはかくことがなくなったら、あちこちにきました。いろいろなところへいくといっぱいかくことができました。ぼくはなまけ「二ころがでてくると、せんせいのかいてくれたことをおもいだしてがんばっています」

小谷先生はさきほどから胸がどきどきしていた。鉄三がエンピツをもってなにかかいているのだ。なにげない顔をして、そつとのおど、鉄三はいっしょうけんめい文をかいていたのだ。

小谷先生はどつきがはげしくなった。

鉄三がエンピツをおくのを見とどけてから小谷先生はいった。

「できましたか」

「はい」

おおかたの子どもは返事をした。

「だれのを読もうかな」

小谷先生はまよっていた。始めて鉄三が文をかいたのだから、それを読んでやりたい。でも、もしそれがわけのわからない文だったら、鉄三に恥はじをかかすことにもなりかねない。

どうしよう。小谷先生は頭がくらくらした。子どもを信じることだ、どこかでそんな声がした。そうだ鉄三ちゃんを信じよう。

「鉄三くんのを読みましよう」

小谷先生は鉄三の原稿用紙を手にとるといそいで眼を通した。祈るような気持だった。

「ぼくわりとりとみたそれかだはこなかへりとりとみたまたりとりとみたあかいやつでたぼくわはながずんとしたさいらのんら  
みたいぼくわこころがずんとしたぼくはあかいやつすぎこたにせんせもすぎ」

小谷先生は大きな声で読みはじめた。

「ぼくはじつとじつと見た。それから、はこの中までじつとじつと見た。赤いやつが出た。ぼくは鼻がずんとした。サイダーを飲  
んだみたい、ぼくは心がずんとした。ぼくは赤いやつがすぎ、小谷先生も好き」

こたに先生も好きというところへくると、小谷先生の声はふるえた。たちまち涙がたまった。たえかねて小谷先生はうしろを向いた。子どものだれかが手をたたいた。すると、あっちからもこっちからも拍手がおこった。拍手が大きくなった。足立先生も手をたたいた。折橋先生も手をたたいている。みんな手をたたいている。

教室は拍手で波のようにゆれた。

(灰谷健次郎作『兎の眼』より)

## 手と心で読む

おおしま  
大島 けんすけ  
健甫

みなさんの中で、駅の自動券売機の表面に、小さな点のうき出たテープがはってあるのに気づいた人はいませんか。よく注意してみると、郵便局や、市役所の中などでも見つかるかもしれません。それは、点字といって、わたしたち目の不自由な者が、指でさぐって読む文字なのです。

点字について、わたしには、こんな思い出があります。

十九歳のとき、わたしは、急に目を悪くして入院しました。もう回復は望めないと分かってからも、しばらくの間、わたしは点字を覚える気になれませんでした。まだ、新聞の大きな見出しぐらいは読んでいましたし、太い鉛筆で文字を書く練習もしていました。それまで親しんでいた文字とはなれることは、まるで心のふるさとを失うように思えたのです。

そんなわたしに、点字を覚えるように働きかけたのは、母でした。母は、いつの間にか点字を習いに通っていたようです。一九四四年の冬のある日、病室にやって来た母は、少しあつめの紙をわたしに手わたして、言いました。

「いっしょに勉強してみようよ。」

母が自分の手で打ってきた北原白秋の詩を、わたしはわすれることができません。

からまつの林を過ぎて、

からまつをしみじみと見き。

点字を指先で読み取るのは、初めのうちはなかなかむずかしいことです。かじかむ指をあたたためあたたため、わたしは、何日もかかって、ようやく一ペんの詩を読んだのでした。

勉強し始めてみると、自分で自由に使える文字をもつことが、どんなに楽しく、どんなに大切であるかが分かってきました。読む速さも、練習とともにどんどんまして、点字の図書館から次々に本を借りて読みました。そのうちには、読みたい本がまだ点字になっていないのが、もどかしく感じられるほどになったのでした。

今、世界で使われている点字は、一八二五年、フランスのルイ・ブライユという人が考え出したものです。日本では、それを五十音に組みかえて使っています。この点字は、たて三点、横二列の六点で一文字が作られています。これらの点を、あるものは打ち出し、あるものは空白にしておく組み合わせで、五十音と、そのほか十数種類の記号ができるのです。さらに、記号と文字とを組み合わせ、数字やローマ字、音符などを表すこともできます。盲学校の子どもたちは、これらを使って作られた教科書で学習しています。

点字には、不便なこともいくつかあります。例えば、かさばることです。みなさんが使っているこの教科書を点字本にすると、大学ノートぐらいの大きさで、あつさが四センチメートルほどにもなります。また、一度打った点字は、直すことがむずかしく、書きこみや線を入れることもできません。けれども、これぐらいの不便は、文字をもつ喜びにかえられるものではありません。

わたしが点字を学び始めたころ、点字は、世の中で、公式な文字としてはあまりみとめられていませんでした。しかし今では、選挙のときに点字で投票ができたり、一部の大学や公務員の試験を点字で受けられるようになったりして、だんだんに理解されてきています。

最近では、点字ワープロといって、点字と同じように六つのキーを使って、ふつうの漢字かな交じり文を書く機械が工夫されました。また反対に、ふつうの文字のキーを打てば、点字にしてくれる機械もできています。さらに、本を声に出して読んでくれる機械も作られています。

目の不自由な人の中に文字を持ちこんだのは、ルイ・ブライユでした。これからも、人間のちえは、人々の心を結ぶ便利な道具や方法を考え出していくでしょう。

私は、テレビの脚本を書いて身すぎ世すぎをしている売れのこりの女の子(?)であります。脚本家というタイトルよりも、味醂干し評論家、または水羊羹評論家というほうがふさわしいのではないかと考えております。今日は水羊羹についてウンチク的一端を述べることに致しましょう。

まず水羊羹の命は切口と角であります。

宮本武蔵が眠狂四郎が、スパッと水を切ったらこうもなるのかというような鋭い切口と、それこそ手の切れそうなどがった角がなくては、水羊羹といえないのです。

水羊羹は、桜の葉っぱの座ぶとんを敷いています。うす緑とうす墨色の取合わせや、ほのかにうつる桜の匂いなどの効用のほかに、水羊羹を器に移すときのこととも考えられているのです。つまり、下の桜のおザブを引っぱって移動させれば、水羊羹が崩れなくてもすむという、昔ながらの「おもんばかり」があるのです。

水羊羹は江戸っ子のお金と同じです。宵越しをさせてはいけません。傷みはしませんが、「しわ」が寄るのです。表面に水気が滲み出てしまつて、水っぽくなります。水っぽい水羊羹はクリープを入れないコーヒーよりも始末に悪いのです。

固い水羊羹。

これも下品でいけません。色も黒すぎては困ります。

小学生の頃、お習字の時間に、「お花墨」という墨を使っていました。どういうわけか墨を濃くするのが子供の間に流行つて、杉の葉っぱを一緒にすると、ドロドロになつて墨が濃くなるというので、先生の目を盗んでやっていました。今考えてみますと、何も判っていないかっただんだなと思います。墨色の美しさは、水羊羹のうす墨の色にあるのです。はかなくて、ものあわれがあります。

水羊羹は、ふたつ食べるものではありません。口あたりがいいものですから、つい手がのびかけますが、歯を食いしばって、一度にひとつで我慢しなくてははいけません。水羊羹を四つ食つた、なんて威張るのは馬鹿です。その代り、その「ひとつ」を大事にしま

しようよ。

心を静めて、香りの高い新茶を丁寧に入れます。私は水羊羹の季節になると白磁のそばちよくに、京根来ねごろの茶卓を出します。水羊羹は、素朴な薩摩硝子の皿か小山岑一さん作の少しピンクを帯びた肌色に縁だけ甘い水色の和蘭陀手の取皿を使っています。

水羊羹と羊羹の区別のつかない男の子には、水羊羹を食べさせてはいけません。そういう野郎には、パチンコ屋の景品棚にいらんで、外箱だけは大きいけど、ボール紙で着ぶくれて、中身は細くて小さいいやにテカテカ光った、安ものの羊羹をあてがって置けばいいのです。

ここまで神経を使ったのですから、ライティングにも気を配ろうじゃありませんか。蛍光灯の下で食べたのでは水羊羹が可哀そうです。

すだれ越しの自然光か、せめて昔風の、少し黄色っぽい電燈の下で味わいたいものです。ついでに言えば、クーラーよりも、窓をあけて、自然の空気、自然の風の中で。

ムード・ミュージックは何にしましょうか。

私は、ミリー・ヴァーノンの「スプリング・イズ・ヒア」が一番合うように思います。この人は一九五〇年代に、たった一枚のレコードを残して、それ以来、生きているのか死んだのか全く消息の判らない美人の歌手ですが、冷たいような甘いような、けだるいような、なまぬくいような歌は、水羊羹にピッタリに思えます。クラシックにいききたい時は、ベロフの弾くドビュッシーのエスタンプ「版画」も悪くないかも知れませんね。

(中略)

水羊羹が一年中あればいいという人もいますが、私はそうは思いません。水羊羹は冷し中華やアイスクリームとは違います。新茶の出る頃から店にならび、うちわを仕舞う頃にはひっそりと姿を消す、その短い命がいいのです。

(向田邦子著『水羊羹』より)



『広辞苑』改訂に向け、語釈や用例をひそかに検討したチームが存在する。某月某日、私はそんな極秘情報を入手した。

「語釈」「用例」って、なに？」と疑問に思いかたもおられるはずなので、最初にちよつと辞書用語を説明しよう。できたてほやほやの『広辞苑第七版』で、「検討」という語を引くと、次のように書かれている。

けんとう ウ:タ 【検討】調べたずねること。詳しく調べ当否を考えること。「ーを加える」

「けんとう ウ:タ 【検討】」が、「この項目の「見出し語」である。

「語釈」は、「見出し語」の意味を説明した部分のことだ。つまり右記の例だと、「調べたずねること。詳しく調べ当否を考えること。」が、「検討」という言葉の語釈である。

「用例」は、見出し語がどういふふうに使われるのかを、具体的に示した部分のことだ。つまり右記の例だと、「ーを加える」が、「検討」という言葉の用例である。

用例には二種類あって、「実際にこゝに使われている例があります」と文献から引用して示すものと、「こゝいふふうに使われるよね」と辞書がわが例文を作って示すものがある。

文献から引用した用例の場合は、「源」などの略称が併記されている。「この用例は、『源氏物語』から引用しました」という意味だ。「検討」の用例を見ると、引用元についてはなにも記されていないので、「これは辞書がわが用例として作った例文なんだな」とわかる。

『広辞苑第六版』を改訂し、『第七版』を刊行するにあたって、このような語釈や用例を、ひとつひとつ検討した人々が存在するかどうかというのだ！

そりゃあ、辞書を改訂するとなれば、「ここはちょっとわかりにくかったかな」という部分を改善するのは当然である。そうでなければ、「改訂した」とは言えまい。だが、『広辞苑』には約二十四万語もの見出し語が収録されている。見出し語の意味をわかりやすく適切に説明する語釈や用例になっているか、二十四万語ぶん、ひとつひとつ検討するの……？ それって大変すぎないか？

いや、すべての語釈や用例を一気に検討するのは、時間的にも物理的にも、さすがに無理だと思われる。しかし、二十四万語のなかから検討対象を絞ったとしても、相当の数に上るはずだし、どういう基準で「この語釈や用例を検討してみよう」と選ぶの？

いったいどんなひとが、どういうふうに、膨大な数の検討をなしとげたのだろう。知りたくてたまらなくなった私は、さっそく動いた。『広辞苑』の改訂作業に携わっている、岩波書店辞典編集部編集者HさんとSさんに賄賂を渡し(嘘です)、検討チームのもとへ案内していただいたのだ。

我々は尾行に注意しながら(嘘です)、東京都立川市にある「国立国語研究所」へ向かった。

国立国語研究所はガラス張りの現代的な建物で、「おしゃれな美術館」といった外観だ。建物内には、「全国で唯一の日本語に関する専門図書室」もある。貸し出しはしていないが、閲覧室に並んでいる資料は、だれでも自由に眺めていいし、必要に応じて複写も可能だそう。外国語も含めて、言語に関する研究書や雑誌・学会誌、そしてもちろん辞書もずらりと並んでいて、壮観だった。

国立国語研究所では、言語の専門家がさまざまな研究を行っている。日本語の話言葉や方言、歴史的な変化について研究しているかたもいれば、日本語教育について、あるいは他言語との比較研究をしているかたもいる。つまり、蔵書もすごいが、日本語および言語に関する猛者も集結した、研究機関なのである。

(三浦しをん著『広辞苑をつくるひと』より)

彼はもう十九になっていた。立派に一人まえの仕事ができるのだから、自分としては文選工に昇格させてもらいたいと望んでいた。しかし、印刷所では、彼の腕を認めていながら、ほかの者とのつり合いがあるとか、工場はずうっと欠損つづきだとか言っていて、なかなか一人まえにはしてくれなかった。給料がもらえさえすれば、学資ぐらい、どうにかなるのだが、当てがいぶちの小づかいだけでは、どうすることもできなかった。

そこで彼は、せめて教科書の代だけでもかせぎたいと思って、懸賞の出ている雑誌に、さかんに投書をした。しかし、容易に当選しなかった。けれども、彼は根気よく投書続けた。金がほしかったばかりでなく、文章の練習にもなると思ったからである。

ところが、「少年文壇」に出した論文が、三等に当選した。三等ではあるが、彼は非常にうれしかった。やがて、小為替（こがわせ）で、懸賞金二円が郵送されてきた。彼は、書留を受け取ったのも、小為替を手にしたのも、これがはじめてだった。

その論文は、「処世の道」というので、雑誌社で出した課題に応募したものであった。

世上、処世の道として、三つの『ん』を尊重するもの多し。三つの『ん』とは、即ち、運、鈍、根の三者也。聞く、古河市兵衛翁は之を神の如く信奉する事によりて、今日の成功を致せしもの也と。運に就いては、人力の如何とも為す能わざるものなれば、暫く言わず。されど鈍と根とに關しては、聊か疑いなきを得ず。乞う、吾人をして語らしめよ。頭に丁髷を載せし時世ならばいざ知らず、最近まで丁髷を戴き居りし古河翁の処世法はさもあらばあれ。方今文明の世に於て、単に鈍と根のみを以て、よく人に先んじ得べきや。

まず、こういった調子の文章である。ところで内容であるが、彼の意見に従えば、三つの「ん」は、過去の処世観である。これでは不十分であるから、よろしく、五つの「ん」を尊重しなければいけないと説いたものである。五つの「ん」というのは、「はっぶん」

「がくもん」、「きんべん」、「けつだん」、それから「てんうん」の五つをさしたものである。「発憤」を第一にあげたのは、心に燃ゆるものがなかったなら、走りだせるものではない。汽車が長い道をまっしぐらに走るのは、蒸気のカマが煮え立っているからだ。世を渡るには、何よりも、まず、うちに燃え立つものがなければならない、というのである。第二の「学問」は、三つの「ん」の中には、はいつていないものだが、彼にとっては、これは、なくてはならないものだった。これからの世の中では、学問がなくなつてはだめである。これは石炭のようなものだ。これがなかったら、途中で汽車はとまってしまふというのである。しかし、その学問は、実用の役に立つものでなくなつてはいけないとしたところは、そっくり、「学問ノスゝメ」そのままである。第三の「勤勉」は改めて説明するまでもないことだが、彼はこの中に、前の「鈍」と「根」とを織りまぜていた。そして、仕事の途中で、ぐちを言ったり、言いわけをしたりしてはいけない。一心不乱に自分の業務をばげむべきである。機関士のように、まっ黒になって働くべきである、と説いている。いつかのランプの事件が、彼にはいい経験であつたらしい。けれども、発憤し、学問を修め、勤勉努力をしたところで、事に当たつて、決断の勇を欠く時には、けつして成功するものでないというたてまえから、第四に「決断」を置いた。この四つのものは、人間の力でできることであるから、われわれはこれを十分に活用しなくてははいけない。そうして、しずかに第五の「天運」を待つべし、というのが、そのだいたいの主張である。

(山本有三著『新版 路傍の石』より)

## 指揮者

「指揮者」は英語で Conductor、ドイツ語では Dirigent、案内人とか管理人、伝導体という意味もある。Director は文字どおり指導者、演出家、監督。フランス語では Chef d'orchestre というからオーケストラの料理人ともいえる。そういういろんな意味を含んだ楽団の音楽づくりのリーダーである。

指揮者はまず、演奏する管弦楽曲の総譜スコアのあらゆるパートに精通し、スコアを見ながらその曲全体の主要パートをまとめてピアノですらすら弾けなければならない。もちろん、各パートの奏者にいろいろ注文をつけて納得してもらったためには、あらゆる楽器の音域や運指の特性などに通じていなければならない。楽員もデリケートな芸術家だし、音楽院や芸大の教授だったりもするから、そういう難しい人びとを五十人も百人もまとめあげて、自分の世界を創っていくのだからたいへんな仕事である。

しかし彼らはいつも私たちに背中だけを見せて仕事をしている。逆に言えば、彼らには見えない背中をおおぜいの人からじろじろ見られているのだ。しかし、カラヤンなどは後ろ姿がほとんど不動だから、指揮台の上で何をやっているのかはなはだ分かりにくい。テレビで斜め前方からアップを見たかぎり、ただ瞑目して手首をぐるぐる回転しているだけだった。ところがそれでも、楽員の奏でる音楽は一糸乱れず、流麗自在に展開していくのである。たぶんリハーサルが徹底していたのである。

そこへいくと小澤征爾の腰がツイストする大きなジェスチャーは音楽の流れとイメージが重なって分かりやすい。バーンスタインなどは何か重いものを身体からだの内側から絞り出すような指揮ぶり、マーラーに匹ひたりだった。

というように指揮者にはいろいろなタイプがあるが、背中から見えるものはおおむねその指揮者の音楽表現と関わっているとみて

よい。CDでは指揮者が見えない？ いや、音楽は指揮者の人間的個性とやはり分かちがたい、ということを行っているのである。  
とはいえリーダーはいつも背中を見られているのだから、心してかからなければならぬ。

(安芸光男著『クラシックの名曲101』より)

## ピーター・パンとウェンディ

ピーター・パンがはじめて人々の前で空を飛んだのは、1904年12月27日のことであった。その夜、ロンドンの劇場で精巧な機械仕掛けによってピーターが空を飛んでみせたのである。そしてピーター・パンは神話的な存在になった。

幕が開くまで、劇場の関係者たちはいつまでもおとなにならないこの不思議な男の子や妖精が、果たして人々に受け容れられるかどうか不安でいっぱいであった。ところが、妖精のティンカー・ベルが死にそうになった場面で、ピーターが観客に向かって語りかけたとき、驚くべきことが起こったのである。

“...she says she thinks she could get well again if children believed in fairies! Do you believe in fairies? Say quick that you believe! If you believe, clap your hands!”（ティンカー・ベルは皆さんが妖精の存在を信じてくれたら生き返られるだろうって言ってます。あなたは妖精を信じますか？ 信じるんだったらそう言ってください！手を叩いてください！）

すると、ほとんどの人が拍手をして声をかけた。その光景をみてウェンディ役の女優は泣きだしてしまったという。

それ以来、「ピーター・パン」は、戦時中の一回を除いて80年代まで毎年クリスマス・シーズンに上演され、その後はミュージカル化されて今日もなお人々を楽しませている。

作者バリーは、1911年に劇を物語に書き替えた『ピーターとウェンディ』を出版した。（中略）

本を読んだことのない人も、ピーター・パンと聞くと、「空を飛ぶことのできる、いつまでもおとなにならない男の子」を思い浮べるだろう。なぜ、ピーターはこのように親しまれるのであろうか。

その秘密を解く鍵のひとつは、「ピーター・パン」の成立にあるだろう。バリーは大きなセント・バーナード犬を飼っていたが、毎日のように犬の散歩に出かける近くのケンジントン公園でルーエリン・デイヴィズ家の幼い兄弟と知り合った。バリーには、こどもと対等に付合っ  
て仲良くなる特別な才能があった。彼は仲良くなったデイヴィズ家のこどもたちと公園で妖精の話をしたり、夏休みには別荘に招いて海賊ごっこをしたりして遊んだ。「ピーター・パン」

は、バリーの空想から作られた物語ではなく、子どもたちとの実際の遊びから生まれたものであった。空を飛ぶこと、海賊や人魚や妖精やインディアンの住む冒険にみちた島は子どものひそかな願望を実現したものであるといってもいいであろう。

知り合った当時、3人だったデイヴィズ家の男の子は、その後2人の弟が加わって5人となり、すくすくと成長していった。彼らはいずれも豊かな才能と美しさとこどもらしい輝きを備えていた。バリーは、彼らの一瞬のきらめきのようなこどもとしての魅力を作品のなかに永遠に留めておこうとしたのかもしれない。

(石川晴子・武田雅子編『英語で読むこどもの本』より)



みなさんがご存じかどうか知りませんが、言いまちがいを誘発すること、つまり暗示をかけて言いまちがいをひき出すことができるのです。つぎのような逸話いっわがあります。かつて新米しんまいの役者が重要な役をふられたことがありました。『オルレアンおとめの少女』(シラーのロマン的悲劇。一八〇一年作)のなかで、「Comestableコネタブル(元帥)が剣を送り返してよこしました」と王さまに報告する役です。ところが、主役の俳優は稽古けいこのときに、「このおびえている新米先生をからかって、台本とちがって、「Komfortabelコンフォアタベル(一頭立て馬車)が馬を送り返してよこしました」とくりかえしたのです。その目算は当たりました。不運な新米先生は、初舞台でこのまちがった台詞せりふを口にしてしまったのです。もちろん、彼は十分に注意はしていたのです。いや、注意していたからこそ、そう言ってしまったのです。

しくじり行為にみられるこのようなほんの小さな特徴は、不注意という理論だけでは説明しつくせるものではありません。しかし、だからといってこの理論がまちがっているというわけでもないのです。おそらくこの理論には、なにかが欠けているのです。この理論を完全なものにするためには、なにかを補ってみなければなりません。一方、しくじり行為自体にも、また、別な側面からみることができるものも多々あります。

しくじり行為のなかで、私どもの意図に合うものとして、ここでは「言いまちがい」をとりあげてみましょう。書きまちがいや読みまちがいの場合を選んでみても同じことです。そこでまず、私どもは結局のところ、これまでは言いまちがいが、いつ、どんな条件のもとで起こるかということの問題にきてただけであり、この問題に対しての回答を得ただけにすぎない、と言わなくてはならなくなります。ところが、私どもの関心を別なほうに向けて、なぜ私どもはこのような言いまちがいをして、別な言いまちがいのことを口から出さないのかを問題にすることもできるはずで、言いまちがいの結果がどうなるのかをみることもできるというわけです。この問いに答えることができず、言いまちがいの効果が解明されないかぎり、たとえば生理学的解釈はできても、この現象は心理学的には偶

発的なこととされたままになります。私が言い間違いをします。そのときには、言い間違いの仕方は無限にあるはずで、一つの正しいことばの代わりに何千とある他のことばのうちの一つを選んで口にする、すなわち一つの正しいことばの代わりに無数の言い間違いをすることができるわけです。あらゆる可能性のなかから、わざわざこの言い間違いを選ばせるなものがあるのでしょうか。それとも、それはたんなる偶然であり、自分勝手な考えなのでしょうか。

(フロイト著、懸田克躬訳『精神分析学入門 I』より)

美登利はかの日を始めにして生れかはりし様の身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひにと行けば今に今にと空約束はてし無く、さしもに中よし成けれど正太とさへに親しまず、いつも恥かし氣に顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難く成ける、人は怪しがりて病ひの故かと危ぶむも有れども母親一人ほゝ笑みては、今にお侠きやんの本性は現れまする、これは中休みと子細わけありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成つたと褒めるもあれば折角せつかくの面白い子を種なしにしたと誹るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事まれに、唯夜な〜の弓張提燈、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影ぞろ寒げに、折ふし供する三五郎の声のみ何時に交おとけらず滑稽では聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出る風説うわさをも美登利は絶えて聞かざりき、有し意地をば其まゝに封じ込めて、此処しばらくの怪しの現象さまに我れを我れとも思はれず、唯何事も恥かしうのみ有けるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有けり、誰たれの仕業しわざと知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪ざしに入れて淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに伝へ聞く其明けの日は信如が何がしの学林に袖の色かへぬべき当日なりしとぞ。

(樋口一葉著『たけくらべ』より)



忘月忘日 例の自転車を抱いて坂の上に控へたる余は徐ろおもむに眼を放つて遙かあなたの下を見廻す、監督官の相図を待つて一気に此坂を駆け下りんとの野心あればなり、坂の長さ二丁余、傾斜の角度二十度許ばかり、路幅十間を超えて人通多からず、左右はゆかしく住みなせる屋敷許なり、東洋の名士が自転車から落る稽古をすると聞て英政府が特に土木局に命じて此道路を作らしめたかどうか其辺は未だに判然しないが、兎に角自転車用道路として申分のない場所である、余が監督官は巡査の小言に胆を冷やしたものが乃至ないしは又余の車を前へ突き出す労力を省く為か、昨日から人と車を天然自然ところがすべく特に此地を相し得そつて余を連れだしたのである、

人の通らない馬車のかよはない時機を見計つたる監督官はさあ今だ早く乗り給へといふ、但し此乗るといふ字に註釈いが入る、此字は吾等兩人の間には未だ普通の意味に用られて居ない、わが所謂乗るいは彼等の所謂乗るにあらざるなり、鞍に尻おろを卸さざるなり、ペダルに足を掛けざるなり、たゞ力学の原理に依頼して毫も人工を弄せざるの意なり、人をもよけず馬をも避けず水火をも辞せず驀地ばくちに進するの議なり、去る程に其格好たるや恰も疝氣持が初出はつてに梯子乗はしこのりを演ずるが如く、吾ながら乗るといふ字を濫用しては居らぬかと危ぶむ位なものである、去れども乗るは遂に乗るなり、乗らざるにあらざるなり、兎も角も人間が自転車に附着して居る也、而も一氣呵成に附着して居るなり、此意味に於て乗るべく命ぜられたる余は、疾風の如くに坂の上から転がり出す、すると不思議やな左の方の屋敷の内から拍手して吾が自転行を壮にしたいづらものがある、妙だと思ふ間もなく車は既に坂の中腹へかゝる、今度は大変な物に出逢つた、女学生が五十人許り行列を整へて向からやつてくる、斯こうなつてはいくら女の手前だからと言つて気取る訳にもどうする訳にも行かん、両手は塞つて居る、腰は曲つて居る、右の足は空を蹴て居る、下り様おとしても車の方で聞かない、絶対絶命仕様がなから自家独得の曲乗のまゝで女軍の傍をからも通り抜ける、ほつと一息つく間もなく車は既に坂を下りて平地にあり、けれども毫も留まる景色がない、しかのみならず向ふの四ツ角に立て居る巡査の方へ向けてどん／＼馳けて行く、気が気でない、今日も巡査に叱られ

る事かと思ひながらも矢張曲乗の姿勢をくづす訳に行かない、自転車は我に無理情死を逼る勢で無暗に人道の方へ猛進する、とう／＼車道から人道へ乗り上げ夫でも止まらないで板塀へぶつかつて逆戻をする事一間半、危くも巡查を去る三尺の距離でとまった、

(夏目漱石著『自転車日記』より)

黒柳 私がね、最初に見た映画は『オーケストラの少女』。

淀川 ああ、『オーケストラの少女』ご覧になった。ずいぶん昔、小さいときでしょう？

黒柳 あれは特別に。父がヴァイオリニストだったので。まあオーケストラの、音楽の話だということだね。

淀川 許可が出たの、お父さんの？

黒柳 ええ。あのディアナ・ダービンの。

淀川 ディアナ・ダービンの『オーケストラの少女』、まあ忘れもしません。あれは昭和十三年頃ですね。封切ったのは私が二十九歳の頃でした。あの映画をね、お父さんがあなたさんにご覧になりなさいと薦めた訳が、私にはよくわかります。あれはきれいなストーリーできれいな音楽で、きれいなディアナ・ダービンが見事に上手に歌いましたね。それでね、お父さんが失職してるんです、音楽家の。もうお父さんの失職がすっかり忘れて、それでこのちっちゃな十四、十五歳の娘さんが、失職してるいろんな音楽家、ピアノ、ヴァイオリン、全部集めてお父さんと一緒にして、どうにかしてこのオーケストラ団をいいところで演奏させたいと、ひとりで思う話ですね。あちらこちらを少女が走り回るといふ。

黒柳 そうなんです。でも、そこまで覚えていない。

淀川 覚えていらっしやらない？

黒柳 ええ。覚えているのは、彼女が椅子の下に隠れてね、劇場の中を這って行くと、帽子につけた羽だけが椅子の向こうに、ツツツと見えるものですから、そこにいるということがわかってっちゃうとか、ストコフスキーという指揮者がいてとか。

淀川 いいところ覚えていらっしやる。やっぱりそういうところが感覚的に入るんですね。カーネギーホールに行きまして、ストコフスキーが演奏している、あのおじさんに頼もうと思ったんですね。けれども隠れて行かなくちゃいけないんですよ、こう、席のあいだを。だからスーツと帽子の羽だけが通るのね。あんたいいもの持っていらっしやる、いいところ覚えていらっしやる。それでストコフ

スキーに言おうと思っても、言えないんですね、頼むこともできない。そうするとストコフスキーが指揮している、「椿姫」なり、「アイダ」なり「リゴレット」なりをボックスから思わず歌ってしまうんですね、ディアナ・ダービンが。注目して、気づいてほしいがために大きな声で、だんだん、だんだん声張り上げて。そしてストコフスキーが、誰が歌っているんだろう、いい歌だな、と見ると、お父さんの失職を助けてくださいって。それでとうとう彼がみんなを助けてあげて、立派な立派な劇場で演奏させるというお話でしょう。親孝行できれいなお話ね。

黒柳 まあ、すごい。私が『オーケストラの少女』のお話をしたのは今、突然だったのに、そんなに鮮明に覚えていらっしやる。

淀川 そのぐらいは覚えてる、これはヘンリー・コスターのいい作品ですからね。それよりあなたが、あの羽がね、あの帽子の羽が席と席のあいだをスーツと動いて行くのを覚えていらっしやるのが、私は、まあやっぱりねえ、と思ったぐらいですよ。

黒柳 でも、よく皆さんが淀川先生のことを映画の生き字引なんておっしゃいますけど。

淀川 まあ、とんでもない。

黒柳 ほんとによく覚えていらっしやるんですね。

淀川 それは、頭の中で映写できますねえ、『オーケストラの少女』はね。

黒柳 まあ、そうですね。

淀川 いい映画でしたね、きれいなストーリー、きれいな音楽、あの頃のほんとにいい映画でしたよ。あなたはいいい映画をご覧になりましたね。

黒柳 あれが洋画の最初でしたのね。で、先生は『ウーマン』というのは後年もご覧になったんですか？

(黒柳徹子・淀川長治著『徹子と淀川おじさん 人生おもしろ談義』より)



## ぷくつとぷくらむ愛らしいマドレーヌ

マドレーヌは、スポンジケーキと違い粉にベーキングパウダーを加えてぷくらませます。生地は、すぐに焼かずに休ませます。

貝殻形の筋目がきれいな表もいのですが、裏側はぷくつとぷくらんだ愛らしい焼き上がりになります。どうしてこうなるのでしょうか。小さな焼き型に入れた生地はオーブンに入ると、間もなく全体が少しぷくらんで表面が乾き、やがて焼き色がつきはじめます。中では加熱が進んで水分が水蒸気に変わり、ベーキングパウダーからは炭酸ガスが出て中央部に圧力がかかって押し上げていき、そして割れ目ができ、さらにぷくらむということなのです。

## 材料（マドレーヌ型14個分）

卵 100g（約2個）

塩 ひとつまみ

グラニュー糖 100g

レモンの皮のすりおろし 1/2〜1個分

レモン汁 小さじ2

薄力粉 100g

ベーキングパウダー 小さじ2/3

バター（食塩不使用） 100g

\*カップケーキの型で焼いてもよい。

## 準備

・卵は室温に戻しておく。

- ・型にバター（分量外）をぬって冷蔵庫で冷やし、強力粉（分量外）をふって余分を落とす。
  - ・バターは湯せんで溶かし、冷めないように湯せん鍋で保温しておく。
  - ・粉とベーキングパウダーは合わせておく。
  - ・直径1cmの丸口金を絞り出し袋につける。
- \*オーブンを180〜190℃に予熱

#### 生地を作り、休ませる

- 1 ボウルに卵と塩を入れてハンドミキサーでほぐし、グラニュー糖を一度に加え、さらに軽く泡立つ程度に混ぜる。
- 2 レモンの皮、レモン汁を加え混ぜる。
- 3 ベーキングパウダーと合わせた粉をふるいながら一度に加え、泡立て器で均一になるまで混ぜ合わせる。
- 4 保温しておいたバターを一度に加え、均一になるまで混ぜる。
- 5 ボウルにラップフィルムをかぶせ、涼しいところで2時間ほど休ませる。

#### 型に絞り入れ、焼く

- 6 休ませたら、へらで静かに均一になるように混ぜる。
- 7 口金をつけた絞り出し袋に生地を入れる。用意した型の8分目くらいに絞り入れ、全体に霧を吹いて、180〜190℃（いつものスポンジケーキよりも高め）のオーブンで約20分焼く。
- 8 指先でふれてみて弾力があって、ふくらんだところが乾いていけば焼き上がり。型ごとぬれ布巾の上にトンと落とす。型からはずして冷ます。

\*小さな型にはスプーンなどで入れるほうが簡単と思われるが、絞り出し袋のほうが分量もそろう、型も汚さずに入れられる。

（相原一吉著『バターの使い方がわかるお菓子の本―4つの加え方とバタークリーム』より）

箏曲や三味線音楽など日本の伝統音楽は中世の頃より視覚障害者の職業として位置づけられてきた。ヘレン・ケラーの来日に際しては、国内の視覚障害を持った音楽家もまた彼女のために演奏した。

宮城道雄（1894 - 1956）、兵庫県生まれの全盲の箏曲家・作曲家である。東京音楽学校教授、日本芸術院会員。正月に演奏される「春の海」の作曲者として有名である。ヘレン・ケラーの来日にあたっては毎回、歓迎音楽会で演奏を行っている。宮城道雄の記述である。

その会のはじめに、私はケラーさんの徳をたたえる意味で六段を演奏した。所がケラーさんは、途中から私の箏に手を触れ、その曲の緩急を一方の手でタクトのようなことをされたらしい。聴衆が感動していたらしい様子であった。殊に最後のところで、手をふるわせる裏連という箏の手法のときには、そのトレモロに合わせてケラーさんが、手を細やかにふられた。私もその様子が分かったので、拍子より長くした。そしてその呼吸が合ったような気がした<sup>(1)</sup>。

この記述から宮城道雄とヘレン・ケラーの間では音楽を通じたコミュニケーションが行われ、これはアンサンブルと言っても過言ではないだろう。緩急の表現が西洋音楽とは大きく異なり、聴きなれなかったであろう日本の音楽に、手で触れて一緒に演奏できたのは素晴らしいことである。宮城道雄が演奏する箏の龍尾（弾く方とは反対側の端）に、ヘレン・ケラーが左手で触れて、もう片方の手を肩まで上げてリズムを取っている写真が現存する。

もうひとつ、宮城道雄の記録を紹介する。栗津キヨの記述である。

プログラムが進んでいよいよ献曲が始まろうとした時、ヘレン・ケラー一行が入場した。出演者は、全員せい一杯の拍手をもって迎えた。「ヘレン・ケラー女史に捧ぐる歌」<sup>(2)</sup>は斎藤百合の詩に、宮城道雄が作曲したもので、この夜は、宮城道雄が琴をかなでながら、琴歌らしく自分で歌った。ヘレン・ケラーは片手を琴に触れ、片手を傍らのミス・トムソンの唇に当てて、その言葉を読みながら聞いていた。歌が終わると彼女は「静かで素朴な曲」と感想を述べた<sup>(3)</sup>。

ヘレン・ケラーが通訳のポーリー・トムソンと共にステージ上の箏の龍尾側の脇に腰掛けて、

右手で宮城道雄が演奏する箏に触れて、そしてもう片方の手は通訳のポーリー・トムソンの唇に触れて歌詞を聴いている写真が現存する。全盲の宮城道雄と全盲ろうのヘレン・ケラーが、お互いの限られた感覚器官をフルに活用して感動を共有し合おうとする必死の思いが緊張感と共に伝わってくる写真である。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

- (1) 宮城道雄、「悟りが觸れた音の波」、毎日新聞、1948年9月26日、1948
- (2) 楽譜「歓迎歌（語り草）ヘレン・ケラー女史に捧ぐる歌」、財団法人 宮城道雄記念館所蔵
- (3) 栗津キヨ著、『光に向かって咲け—斎藤百合の生涯』、岩波書店、2008  
(佐々木幸弥著『ヘレン・ケラーの音楽受容に関する研究  
～武蔵野美術大学研究紀要 No. 42 (2011)』より)

## 1 古代オリエント世界

### メソポタミアとエジプト

メソポタミアとエジプトはユーラシア大陸の西南部とアフリカ大陸東北部とにあつて、地理的にも歴史的にもたがいに密接な関係を有し、ともに古代オリエント世界の中心をなした。このうちティグリス川・ユーフラテス川流域のメソポタミア（「川のあいだの地域」の意）地方では、前3千年紀前半、それ以前すでにこの地方の南部に成立していた民族系統不明のシュメール人による都市国家のあいだに統一の気運が生じた。これらの諸都市は、相互のあいだで主導権の移動をかさねながら隆盛にむかい、メソポタミアで最初の高い文化を形成した。シュメール諸都市はやがて北部のセム語系遊牧民族アッカド人によって征服・統一され、さらに前2千年紀にはいると、同じくセム語系のバビロン第1王朝が成立して、メソポタミアは以後、強力な専制王朝のもとにおかれた。ハンムラビ王〈前18世紀頃〉の時代がその最盛期で、王の発布したハンムラビ法典は、オリエント諸国のその後の法典編纂の模範となった。

エジプトは周囲を海と砂漠でかこまれ地理的に孤立しているため、一時期をのぞくと、古代をつうじてメソポタミアにおけるような支配民族の交代はなかった。ナイル川流域ではすでに前4千年紀にエジプト語系の言語を用いる人びとにより多数のノモス（小部族国家）が形成されていたが、前3000年頃、これらを統一する王国が成立し、以後前6世紀にいたるまで、王朝の交代をくりかえしながらも、ファラオ（王）の支配が続いた。ピラミッドはその初期の古王国時代にきずかれた王墓といわれ、オリエント専制支配の象徴とされてきた。

### 民族移動の波

前2千年紀の初め頃、メソポタミア周辺の草原に住むインド・ヨーロッパ系の遊牧民族が移動をはじめ、これをきっかけとして西アジアではさらに大きな変動が生じることになる。なかでも小アジアにはいり前17世紀に王国をたてたヒッタイトは、馬と鉄を武器に力をのばし、またカッシート・ミタンニの両民族もメソポタミアに侵入・定着してそれぞれ王国をきずいた。同じ頃エジプトには遊牧民ヒクソスがシリアから侵入して中王国をほろぼした。

前15～前14世紀にかけて、古代オリエント世界は、ヒッタイト・ミタンニ・カッシート、

それにヒクソスを追放して新王国時代にはいていたエジプトの4国がたがいにきそいながら共存する繁栄期をむかえた。しかし前1200年頃になると、東地中海地方にあらたに民族移動がおこり、そのためにヒッタイトはほろび、エジプトもおとろえた。そして大国の衰退に乗じてセム語系の諸民族がシリアを中心に活躍をはじめた。アラム人・フェニキア人・ヘブライ人などがそれである。フェニキア人は北シリア沿岸にシドン・ティルスなどの都市をつくって地中海貿易に活躍し、アラム人はダマスカスを中心に陸上貿易に力をふるった。フェニキア人もアラム人も商業活動の必要から表音文字を考案し、その後の諸民族のあいだにおける文字の創造と伝播の源となった。とくにフェニキア文字はヨーロッパ系言語のアルファベットの起源となった。

(「世界の歴史」編集委員会編『新もういちど読む山川世界史』より)

## 2章 著作権法関連条文の解説

### 2.1 著作権法第37条(点字に関する部分)の内容と解説

#### (1) はじめに

著作権法第37条は、視覚障害等の障害により視覚による表現の認識が困難な者(以下、視覚障害者等)が墨字(点字に対して印刷された文字のこと)から情報を得るようになるための情報変換を、著作権を持つ人(著作権者)の許諾なしに行うことを認めるための規定です。この節ではこのうち、点字や点字データを製作する際に適用できる規定である、同条第1項および第2項について解説します。

(視覚障害者等のための複製等)

第37条 公表された著作物は、点字により複製することができる。

2 公表された著作物については、電子計算機を用いて点字を処理する方式により、記録媒体に記録し、又は公衆送信(放送又は有線放送を除き、自動公衆送信の場合にあつては送信可能化を含む。次項において同じ。)を行うことができる。

#### (2) 点字に関する規定の特徴

点字に関する規定は、後述する法第37条第3項と比べてみると、大きな特徴があります。それは、誰が行っても適用されることと、どんな目的でも、たとえば営利目的であったとしても適用されるということです。また、視覚障害者等でない人に使ってもらうためであってもかまいません。このことは、法第37条第3項においては、適用されるのは図書館や視覚障害者等向けの福祉施設等に限定され、目的も視覚障害者等に使ってもらうことに限定されることなどと比べると、かなり特徴的なことといえます。

これは、点字については、音声などと比べ利用する人がかなり限定されていることから、ある程度広い範囲で適用されたとしても、著作権者の経済的利益に影響を及ぼすことはないと考えられたためです。このため点字の場合には、利用するにあたってはほぼ制約はない、と考えることができます。

#### (3) 点字資料の製作(第1項)

第1項は、点字資料の製作について定めています。(2)で説明したように、販売を目的に

製作する場合であっても、視覚障害者等でない人向けに製作する場合であっても、目的を問わず点字図書を作ることができます。また、営利企業が作っても、ボランティアが作っても、誰が作ってもかまいません。さらに、翻訳したものを点字で製作することもできます。

唯一の要件は「公表された著作物」を使う、ということです。「公表」とは、一定程度の部数が作られる、インターネット上で配信されている等の形で、ある程度の数の人がその著作物に触れることのできる状態になっていることをいいます。点字図書を製作する対象となる資料はたいていこの要件をクリアしていると思いますので、あまり気にすることはないでしょう。

なお、製作した点字図書については、自由に貸し出したり配ったりすることができます。ただ、営利目的または有料での貸出の場合には、貸与権という権利が働くため、著作権者の許諾を得る必要があります。

#### (4) 点字データの製作・送信 (第2項)

第2項は、点字を打ち出したり表示させたりする元となる点字データの状態で、そのデータを記録媒体にコピーしたり、電子メールで送信したり、インターネット上で配信したりすることについて定めています。この場合も、(2)で説明したように、作る人や利用目的について限定されていませんし、翻訳した上で行うこともできます。「公表された著作物」を使うという要件も、第1項の場合と同じです。

また、点字データを記録媒体に保存したり、点字データが記録された記録媒体(CD, DVD, USBメモリなど種類は問いません)を誰かに提供したりすることもできます。送信については前述のとおり、オンラインデータベースなどを用いてインターネット上に掲載しておき、自由にダウンロードできるようにしておくことや、電子メールによって点字データを誰かに送ること等ができます。

ただ「放送又は有線放送」が除かれていますので、データ放送の形態で点字データを流すことは認められていません。これは、この規定が設けられた2000年当時、そのような形態での利用の実態がなかったためです。

なお、点字データが記録された記録媒体についても、第1項の場合と同じく自由に貸し出したり配ることができる一方で、営利目的または有料での貸出の場合には、貸与権という権利が働くため著作権者の許諾を得る必要があります。

(日本図書館協会障害者サービス委員会、著作権委員会編  
『障害者サービスと著作権法 第2版』より)



## 1 視覚障害者の状況

### ●視覚障害とは

視覚には、視力（ものの形がわかる）、視野（目を動かさないうで見える範囲）、光覚（光を感じる）、色覚（色を感じる）、屈折（網膜に見たものを映す）など、さまざまな機能がありますが、そのうち、視力・視野のどちらか、または両方の機能が十分でないため、眼鏡やコンタクトレンズなどを使用しても見え方がよくなる状態を視覚障害といいます。

視覚障害のある人を<sup>しかくしょうがいしゃ</sup>視覚障害者、視覚に障害のない人を<sup>せいがんしゃ</sup>晴眼者といいます。

### ●視覚障害者の現状

視覚障害者は全国で約 31 万 2000 人で、身体障害者全体の 7.3% であると推計されます。また、65 歳以上の方が全体の 69%、70 歳以上の方が 56%（全国の人口比では、65 歳以上が 27.3%、70 歳以上が 19.2%）と高齢化も進んでいます。

現在の身体障害者福祉法でいう視覚障害者は、視力・視野の二つの機能を基準にして、その障害の程度によって 1 級から 6 級までの等級が設けられています。これらの等級のうち、3 級から 6 級までは大きな文字や強度の眼鏡を使用することによって文字を読むことが可能ですが、1 級と 2 級に該当する人の大部分は、点字または音声によらなければ文字情報を得ることができないという重度の視覚障害者であり、視覚障害者全体の 72.8%、約 22 万 7000 人となっています。[以上、数値は、平成 28 年 12 月厚生労働省「生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）」による]

（全国視覚障害者情報提供施設協会編『初めての点訳 第 3 版』より）

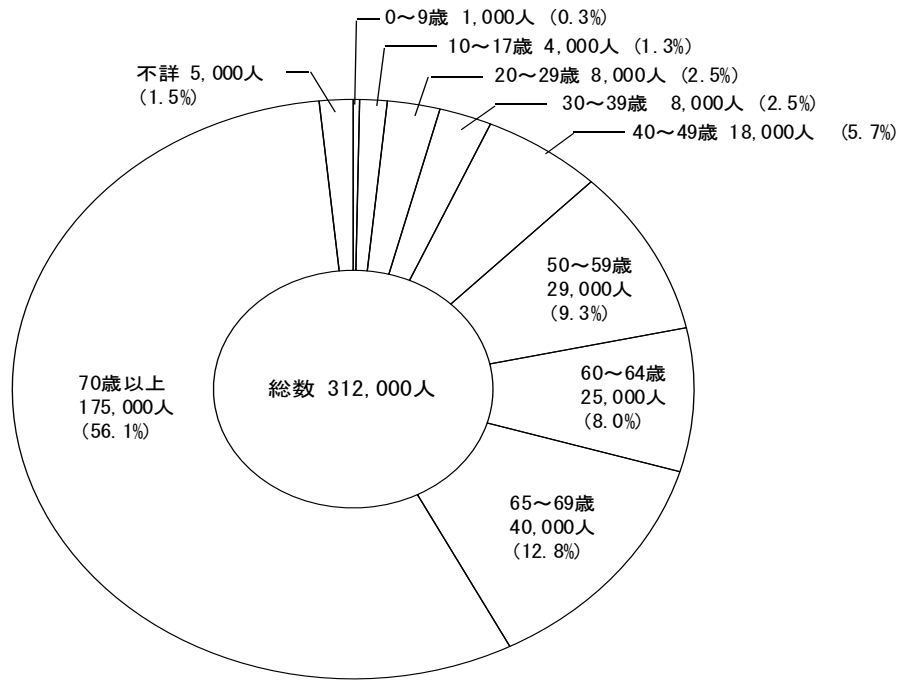


図1 年齢別にみた視覚障害者の状況

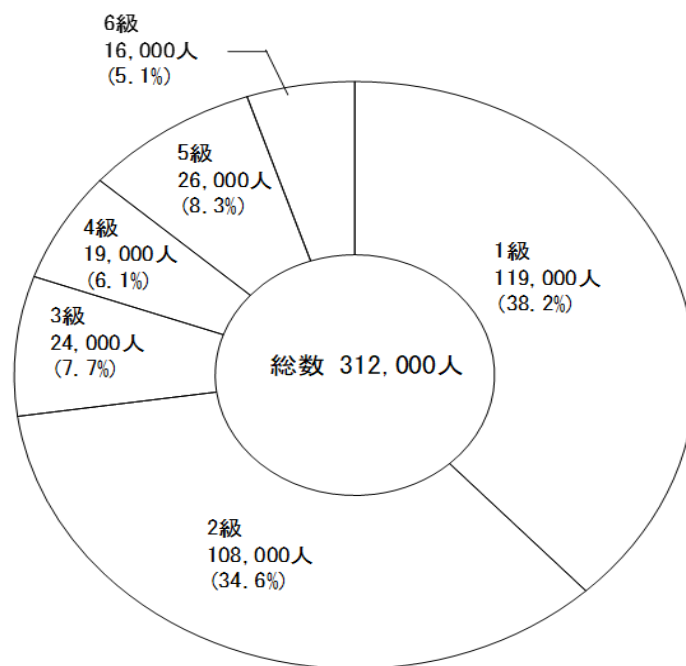


図2 視覚障害者の等級分布

【参考】厚生労働省「平成28年生活のしづらさなどに関する調査(全国在宅障害児・者等実態調査)」

[https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu\\_chousa\\_c\\_h28.pdf](https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu_chousa_c_h28.pdf)

## 11 血液型

### 1. ABO式血液型

ある人の血液を他の人の血液と混ぜると赤血球が凝集する場合としない場合とある。凝集反応がおこるのは、生まれつき赤血球（凝集原）に対する抗体（凝集素）が血清中に存在していて、それが抗原抗体反応をおこしたためである。ヒトの赤血球膜はいろいろな多糖類の抗原物質を含んでいる。そのうち最も重要なのはA、Bと呼ばれる抗原である。ヒトの血液型は表9-5に示すようなA、B、AB、Oの4種類に分類される。A型の人には赤血球にA抗原を、血清に抗B凝集素（ $\beta$ 凝集素）を持ち、B型の人には赤血球にB抗原を、血清に抗A凝集素（ $\alpha$ 凝集素）を持っている。

表9-5 ABO式血液型（+は凝集のおこる場合）

血液型	血球 (抗原)	血清中の凝集素 (抗体)	凝集試験	
			A型の人血清と	B型の人血清と
A型	A	$\beta$	—	+
B型	B	$\alpha$	+	—
AB型	A、B	なし	+	+
O型	なし	$\alpha$ 、 $\beta$	—	—

ABO式血液型はA、B、Oという三つの因子のうち、二つずつの組がメンデルの法則に従って遺伝する。因子型でAOは表現型ではA型に、BOはB型になる。この法則には例外がないので親子鑑定などに適用される。

### 2. Rh式血液型

アカゲザル（*Macacus rhesus*）の赤血球にはRh抗原がある。これをモルモットに注射すると、モルモットの血清中に抗Rh抗体ができる。ヒトの赤血球と抗Rh抗体を生じたモルモットの血清とを混ぜてみると、凝集のおこる人とおこらない人とある。凝集がおこる人の赤血球にはRh抗原が存在するからで、この人をRh陽性という。凝集がおこらない人をRh陰性と

いう。Rh陽性が優性でメンデルの法則に従って遺伝する。

Rh陰性の人には日本人には0.7%しかいないが、白人には15%いる。もし父がRh陽性で母がRh陰性であると、胎児はRh陽性となる。胎盤は胎児のRh抗原を通過しないので、初回の妊娠中に胎児のRh抗原が母体に移行することはないが、分娩に際して胎盤が剥離するとき母体内に移行し、母体の血清中に胎児のRh抗原に対する抗Rh抗体が生じる。2回目以降の妊娠に際しては、母体の抗Rh抗体が胎盤を通過して胎児に移行して胎児のRh抗原と抗原抗体反応をおこし、凝集や溶血が生じる。新生児溶血性黄疸や胎児赤芽球症など重篤な症状になることがある。

### 3. 輸 血

ABO式血液型の発見によって輸血の危険は非常に少なくなった。しかしRh因子のようにABO因子とは全く無関係な因子による凝集は、ABO式の型判定だけでは防げない。さらに、A型赤血球には反応の強いA<sub>1</sub>型と反応の弱いA<sub>2</sub>型とがあり、またABO式血液型の他に、MN式、S<sub>s</sub>式、P式などが知られている。したがって輸血に際しては、給血者と受血者の血球と血清とを交叉して混ぜ合わせ、凝集のおこらないことを確かめる交叉適合試験が必要である。

(真島英信著、松村幹郎改訂『生理学 第6版』より)